

わたしが形創られるとき

— “まとう” 知の記録によるアートベース・リサーチ —

Becoming Myself

-Arts-Based Research through Tracing the Sensation of “Matou”-

古屋千紘¹ 松原正樹²

Chihiro Furuya¹, Masaki Matsubara²

¹筑波大学 情報学群 知識情報・図書館学類

¹College of Knowledge and Library Sciences, School of Informatics, University of Tsukuba

²筑波大学 図書館情報メディア系

²Institute of Library, Information and Media Science, University of Tsukuba

Abstract: This study explores the embodied sensation of “Matou” — the practice that supports the self — through its recorded traces. As these records transformed from text into art, an art-based research approach was adopted, allowing for reflection on the practice itself. The study presents the internal processes and transformations observed within the self.

1 はじまり

1.1 まとうがわたしを外に連れ出す

筆者（以下、私）は大学1年生の頃から、毎朝鏡の前で2時間前後かけて服を選ぶようになった。この行為は単なるファッションへのこだわりではなく、自分の気持ちを支え、人と関わり、外に出るための切実な儀式であった。制服という決まった枠組みから解放された時、私は「身体にじっくりくるものでないと外に出る勇気が湧かない」という強い不安に直面した。この衣服が心身にもたらす「わたし自身を支えてくれる感覚」を、「まとう（纏う）」と呼ぶことにした。

1.2 “まとう” の定義

本研究における「まとう」とは、「全身に広がって感じられ、その身が形創られていく感覚」である。当初は物理的な着衣（衣服を纏う）に限定されていたが、探究プロセスを経て、人・場・空間など、自己の外部にあるあらゆるモノゴトとの接触において生じる体感へと拡張された。これは、鷺田清一[1]が述べる「第二の皮膚」としての衣服や、ルモワヌ＝ルッチオーニの「像としての身体こそが第一の衣服である」という提言と共鳴する。外部のものが自己の内部に取り込まれ、わたし自身が新しく創り直されるような、自己イメージ形成のプロセスを指す。

2 “まとう” を探る

「まとう」についての関連研究と先行研究を提示する。その上で本研究の問い、目的、意義について述べる。

2.1 仮面によって閉ざされたもの

関連研究を検討する中で、「まとう（纏う）」としばしば比較される概念として「装い」に関する研究[2]を参照した。装いは、他者や社会との関係の中で自己を調整し、安心感や信頼感を生み出すコミュニ



図 1.1 纏う日記の記録

ケーション媒体として機能するものであり、人が複数の役割やアイデンティティを生きる現代社会において不可欠な営みである。一方で、身体を覆う装いは意識的・無意識的に役割を演じ分けることを可能にする反面、別の可能なコミュニケーションや自己の在り方を閉ざしてしまう側面も持つと指摘されている。

西尾[3]が、「装い」を他者と自分とのあいだを調整する外向きの行為と捉えるのに対し、私の「まとい」は自己の内側を深く探っていく内向きの行為であると認識している。社会的期待に応じて仮面のように自己像を付け替えてきた経験の中で、自分の所在が分からなくなる感覚を抱え、他者に求められた自己でなければ存在できない状態にあった。そのような状況の中で、仮面のない「わたし」で外に出たいという欲求が生まれ、最初的手段となったのが服（ファッション）であった。本来は「装い」として理解されやすい服を、身体感覚や内的な動きと結びつける「まとう」営みとして用いることで、装いの側面によって曖昧になっていた自己の輪郭を取り戻そうとしたのである。

西尾[3]が「装い」によって閉ざされたコミュニケーションを再び装いによって回復しようとするのに対し、本探究は服の「まとい」的側面に焦点を当て、外部との調整ではなく内面への接近を通して自己を見出そうとする点に特徴がある。つまり本研究は、ファッションを社会的記号としてではなく、自身の存在を探るための身体的・感覚的実践として捉え直す試みである。

2.2 拡張された“纏う”

本研究の実践にも登場する「纏う日記」を対象に、一人称研究¹のアプローチから「纏う」感覚を検討した論文[5]を先行研究として位置づける。そこでは「纏う」は単なる外見の調整ではなく、服を手段として身体を媒介に自己を調整し、己を探る営みとして捉えられている。著者は、毎朝自分に服を合わせていく実践の中で生じる感覚や身体の動きを記述し、それをもとに省察を行っている。この方法は客観的データを中心とする従来研究とは異なり、「わたし」という主体の経験を起点に、数値化できない生きられた感覚を探究しようとする点に特徴がある。

¹ あるひとが現場で出逢ったモノゴトを、その個別具体的な事象を捨て置かず、一人称視点で観察・記述し、そのデータを基に知の姿についての新しい仮説を立てようとする研究[4].

考察の過程で、「纏う」の対象は服そのものに限定されないことが見出される。服装の変化によって他者との距離感や受け止められ方、自身の振る舞い方が変わり、関係そのものを纏う経験が生じる。また、同じ服であっても、身体の状態や時間、場所によって自己のあり方や心の状態が変化し、場を纏う感覚が立ち上がる。こうして「纏う」は、身体と外界との接触面を通して存在を編みなおす行為へと拡張されていく。

論文では、纏うことで生じる微細な心理的変容が丁寧に描かれ、「どう見られるか」ではなく「今日のわたしはどう在るか」という自己イメージが身体を通して発見されていく過程が示される。日々の実践の中で自己が更新されていく感覚が捉えられ、着ること・身を置くことという日常的行為の中に潜む自己との対話に光が当てられている。服を纏うことは自己の存在を再構成する契機となり得るという点に本研究の意義があり、「纏う」は衣服に限らず、人や空間との接触においても感じ得る行為である可能性が示唆されている。

2.3 研究の問い

本研究では、関連研究・先行研究を踏まえ以下の問いを立て実践を行う。

RQ1. “まとう”とはいかなる感覚（営み）であるのか？—“まとう”こと、“まとう”知の記録（表現）においてどのような内的プロセスが生じているのか？

RQ2. “まとう”は自身にどのような影響を与えているのか？—まとうの探究（記録・創作・活動）が自身の日々に加え、他者との関わり・コミュニケーションに影響を与えているのか？

RQ3. “まとう”の共有は可能であるか？—“まとう”“感覚の共有・伝達のため、まとう感覚の創作は可能か、可能だとすればどのような方法があるのか？

本研究において想定される意義としては以下の3点をあげる。

1. 私自身の内的プロセスの探究を通じた自己認識・イメージの確立
2. “まとう”の知の記録（表現）プロセスの提示
3. “まとう”に類する感覚における共有可能性の示唆

ただし、RQ3と意義の3つ目は、実際に実践の渦中でこれらの変容に伴って生まれたものであるため、本研究の当初から想定・設定されていたものではない。

3 研究手法と実践（記録）

3.1 アートベース・リサーチ

本研究では、「まとう」の記録が文字記述から、鏡に描く行為、ドローイング、刺繍、偶像制作といった多様な表現へと変遷していった経緯から、アートベース・リサーチ（ABR）を最も適した研究手法として採用した。ABRは、研究者自身が芸術活動に参加し、その過程で生じる経験や制作物をデータとして扱いながら、研究課題への理解を深めていく方法[6][7]であり、再現可能な客観データではなく、芸術がもつ経験の「質」を可視化し共有する力に依拠する研究パラダイムとして位置づけられている。ここでは、言語化しきれない感覚や質を捉える「鑑識眼」と、それをメタファーや表現によって再構成する批評的営みが研究方法そのものとなる点に特徴がある。さらに、人間を変数として扱う客観主義的研究に対して、身体を伴う関与の中で生じる間主観的理解を重視する「接面の人間学」[8]の視点とも通じる。制作や身体実践においては、出来事を逐語的・時系列的に記述するだけでは制作者の感覚や思考を十分に伝えられない場合があり、フィクション的再構成や記録の再編集といった表現的操作が有効になることが指摘されている。小松[9]も述べているようにABRはまさにこのような再構成を研究の中心に据える方法論である。

本研究における「まとう」探究は、衣服や素材を身体に重ねる行為にとどまらず、線を引くことや、全身に広がる感覚、身体と内面の往還といった体験を含んでいる。これらは実践と同時に生成されるものであり、創作行為から切り離された客観的データとして回収することはできない。そのため、創作物、ドローイング、テキストなど複数の記録表現を通して「まとう」営みを提示できるABRが適していると考えた。

3.2 実践のプロセス

本研究の実践では、「まとう」感覚をめぐって、経験・記録（創作や記述）・振り返り・仮説生成のプロセスを反復的かつ循環的に行う。中心となるのは、「まとう」体感そのものの記録であり、その方法は特定の形式に限定されない。記述、ドローイング、刺繍、ワークショップ、プラクティス、造形など多

様な表現手段を用い、その時点で自身が最も鮮明に体感を捉えられる方法が選択される。したがって、実践や記録の方法は固定されたものではなく、研究の進行とともに変化し得る柔軟なものとして位置づけられている。以下に実践内容を示す。

•纏う日記（2024.6.5-11.25）

服という手段からもたらされる“纏う”体感について、文字記述とコーディネートの写真で記録した。

•鏡日記（2024.12.9-2025.1.17）

感じた“まとい”を鏡上で描くというものだ。それは、アクリル絵の具を使って感じたうごきや質感をアートという形で記録し、さらに必要な時には一緒に文字記述も行った。

•全身鏡日記（2025.3.2 - 3.3）

「まとう」体感をより濃く再体験するために制作された等身大の鏡による記録。鏡という媒体に体感を記すことで、後日、鏡の前に立つ自身の身体にその記録が重なり、当時の体感が再び立ち現れるかを検証する「“まとう”を“まとう”」試み。

•個展「あの子が“纏った”記録展」（2025.3.31 - 4.4）

今までの記録たちを展示した。内省的な自身の記録がはじめて他者のまなざしに触れたことで、「個の感覚」が他者と共有・共鳴し得る可能性を知った。

•体感ドローイング刺繍（2025.4.28 - 5.14）

「感覚を刻んだ服をまとう」ことは可能か？という問いから始まりまった。自身の体感を刺繍として服に直接縫い込む際、「縫い針の先がわたし自身である」かのように身体同期する感覚を記録した。

•体感ボディドローイング（2025.7.1 - 継続中）

生じた感覚を、実際にその身体部位や場所に直接描く実践。皮膚上に描くことで、内的なうごきがより強く感じられ、感覚が補強・再生された。

•纏土偶（2025.7.22-7.31）

それまでのまとった体感を記憶・蓄積している自分の身体を記録しておくため、自身を重ねた土偶を制作した。

•「他者の手を想像で舐めてみる」プラクティス（2025.8.20）

他者と共同で行ったオープン・プラクティスの一環として実施。実際には触れずに想像で他者の手を舐めた「形跡」をドローイングすることで、自身の身体にどのような反応やうごきが生じるかを観察した。

•オープン・プラクティス「非自明な地平」および公開編集（2025.8.18 - 8.29）

展示空間全体を使い、日々異なる角度から実践記録に「補助線」を引いていく公開編集作業。自身の探究をメタ的な視点で捉え直し、再構成するプロセスそのものを実践。



- **胎内ドローイング** (2025.8.27)
他者の一人称的行為詩²から受けた感覚，私とその人に立ち上がった感覚をドローイングする実践。
- **空間ドローイング/プラクティスの接地面** (2025.8.29)
他の実践者やその場の空気の動きから感じた体感を「立ち上がったきたその場所」の空間に直接描くパフォーマンス的实践。
- **タトゥーシール** (2025.9-継続中)
自身の体感ドローイングをタトゥーシール化し，皮膚に貼る実践。直接描く場合と比べ，うごきの広が

りや質感の強度がどう変化するのか観察した。

- **透過日記** (2025.10.24)
透明な板を空間にかざし，その向こう側に見える景色や場のうごきを透かして描く記。空間ドローイングをより手軽かつ視覚的に記録する手法として開発され，ワークショップも実施。
- **茶室壁面ドローイング** (2025.11.3)
特定の間（茶室）の空気感，そこでの自身のうごきを壁面に記録する試み。記録が自身の意図を超えて描いた線そのものがわたしである体験をした。

3.3 感覚をなぞる，やがてわたしになる

これまでの実践では様々なカタチで線の表現が見られた。この線において，ティム・インゴルドの軌跡と糸の理論に類似したものがあつた。感覚をなぞ

² 一人称的に「行為そのもの」を詩として捉える表現・思想のこと。詩＝行われる出来事・振る舞い・実践と考える立場をとる。

るように線を描き、やがてそれがわたしになっていく。詳しくは5章に後述する。

4 記録の変容から生まれた知

4.1 言葉から芸術表現へ

本研究の記録が言葉から芸術表現へと変容した。毎朝の着衣による体感を写真と言葉で綴る「纏う日記」から始まり、言葉にできない繊細な感覚の「わからなさ」に直面し記述が停滞したスランプを、鏡に直接アクリル絵の具で描く「鏡日記」という手法によって乗り越えた。初期の言葉による記録は、事実や解釈、経験を客観的・主観的な言語に落とし込もうとする試みであったが、色という支えを失い言葉の限界を感じた[4.]ことで、自身の身体を映し出す鏡という媒体を通じ、直感的な色や線で体感を重ねる抽象的な表現へと移行した。この変遷に伴い、鏡上の文字記述は次第に減少し、ドローイングによる記録が主となった。ここから、自身の感じたことを外在化し記録する手法として、言葉ではない芸術表現を用いたからこそその利点も見られた。

4.2 記録としての創作

「まとう」の記録を他者に見てもらおう場面では、しばしばそれらが「作品」と呼ばれることがある。しかし私自身は、それらをあくまで記録として捉えており、作品としての形式やメッセージ性、他者から評価される可能性を意識して制作しているわけではない。私はアーティストを志しているわけでもなく、技術力もない中で、自身や記録が否定されたり品定めされたりすることへの恐れから、「作品」と呼ぶことに抵抗を感じる。評価されるくらいなら評価の可能性そのものを消したいという思いがある一方で、他者からのポジティブな反応や笑顔に触れたときには素直に嬉しさも感じており、そのささやかな受容が自身の探究にとってちょうどよい距離感であると認識している。

理想とする記録のあり方としては、幼い頃に無心で描いたクレヨンの落書きのように、意図や評価を超えて残された痕跡でありながら、それを見る人の内側にあたたかさを喚起するようなものが挙げられる。重要なのは視覚的な出来栄ではなく、その奥にある経験や物語（ナラティブ）が自然と浮かび上がる記録であるという点である。

また私にとって論文そのものも実践の一部であり記録であると位置づけている。日々の実践の渦中では「その時のわたし」に没入し、極めて主観的な状

態にあるため、そこから少し距離を取り、広い視野（ワイドアングルビジョン³）で振り返る時間として論文執筆が必要となる。つまり論文は客観的に結果をまとめる行為というだけでなく、まだ見えていないものを探し続ける過程の中で、自身の実践を俯瞰し記録するもう一つの探究行為としての意味も含んでいるのである。

4.3 わからなさを受容すること

2025年7月、私はこれまでの体感を蓄積した自己の象徴として、等身大の「纏土偶」を制作した。しかし、乾燥の過程で土偶には無数のヒビ割れが生じた。技術を持たない自分にとって、このヒビを修復しようとする試みは苦痛であり、自身のコンプレックスや「わからなさ」を突きつけられるような苦悩のプロセスとなった。

この苦悩を乗り越えたのは、ヒビを無理に埋めるのではなく、あえてレースやパールビーズ、刺繍糸といった素材で「纏う」という転換であった。見せなくなかったヒビをポップに強調して見せることで、わたしは自己の不完全さや制御不能な「わからなさ」を受容し、手放す感覚を得た。このポップにみせる表現は、生々しいリアリティを保ちながら、他者との接続を可能にする「やわらかい」回路として機能した。

5 線とわたし

5.1 あらわれた線

鏡日記以降、記録の中に「線」が現れるようになった。私にとって線を描くことは、自身の「なかみ」を確認する行為であり、以下の多様なアクションとして展開された。これまで、わたしは“まとう”を数々の線であらわしてきた。それは、意図したものではなく、私にとって自然発生した記録表現しやすいカタチであったのだろうと思う。鏡日記の実践から出現したこの表現は実践の媒体や手法の変化はあれど、2025年12月現在も続いている表現だ。線を描く、線を重ねる、線を縫う、線を直す、線を繕う、線を着ける、線を立ち上げる、線をつくる、線になる。自身の内の感覚のうごき、質感、速さなど、線によって記録することが自身にとって最も心地良く、偽りがなかった。それがいつの間にか、線がわたしで

³ 物事を一点に絞らず、広い視野・複数の関係性・周辺まで含めて捉える見方／思考の姿勢のこと。

あるような感覚を覚えるようになった。線を描くあいだにおいて、私は、わたしのなかみはここにいる／在るのだと心から思える。物質的に身体がここにある、というだけでなく、普段はなんだかわからない”わたし”というものも感じられる。これが「線になる」感覚である。

—線を描く。外的なものとして、線を捉え描いている。あくまで、”まとう”感覚を描いているのであり、それはわたしではない。そこに、質感やうごき、速さは感じられ、メタ的な視点によるものである。



図 5.1 描く：体感ドローイングスケッチ

—線を重ねる。その奥や、下にあるものが透けて見えるようである。全身鏡日記ではその奥にいる自分の姿を重ねる、そこに映る己に線を重ねる。これは、外的に感じられるもので、重なる実感としてではなく、あくまで視覚的に重なって見えるという意味である。「描く」と同様に、質感やうごき、速さは感じられる。

—線を縫う。体感ドローイング刺繍の実践による服のデザインを行った際、縫い針の先がわたしであるかのように、わたしの身体もうごいている感覚があった。縫い込まれていく、動いていく、針・糸と共に動く。そこと己の身体が同期しているようであった。しかし、質感は感じられず、あくまでうごき、速さ、リズムの共鳴が起こっているという感覚。

—線を直す、直せない。描いた線が、そのままの状態を保っていられず、崩壊した。この際に、私は線を直そうと試みた。纏土偶の制作によって、“まとう”を蓄積・体感した自身の身体ごと記録しておきたいと考え、自身と重ねた等身大の土偶を製作した。その際、土偶に描いた体感ドローイングの線は時間の経過と共にヒビ割れ、崩壊していった。線から亀裂が生まれ、身体がひとつではいられない。その状態

を元に戻すため、線を直そうとした。開いてしまった隙間に粘土を注ぎ込んで埋めていく。同時に私の身体自身も、苦しいような、詰まるような感覚があった。窮屈なような、埋めても埋めても直らない。何度やっても線は元描いた綺麗な状態には戻らなかった。この頃には、線を描いた土偶の身体はわたしになっていた。苦しい、辛い、心が痛い。涙が出てきて止まらなかった。土偶自体は泣いていないのだけれども、土偶の身体とわたしの身体は同じように感じられて、直らないことが悲しくて、寒くて、私の目からは涙が落ちた。あなた（土偶）の目から涙がこぼれていないこともまた悲しく、寂しく感じられた。

—線を繕う。涙が出切ったからなのか、少し経った時間が解決してくれたからなのか、ヒビを元に戻そうとすることをやめ、捨てられなかったキャミソールからちぎれてしまったレース、デニムから取れたパールビーズ、着けなくなってしまったピアス、使いかけの刺繍糸を持ってきた。パールビーズをヒビに重ねる。縫い目のように刺繍糸をつける。ポップにヒビ（見せたくなかった線）を魅せることで、私はこの体験を乗り越えた。苦しさから解放された。自身のわからなさを手放す。

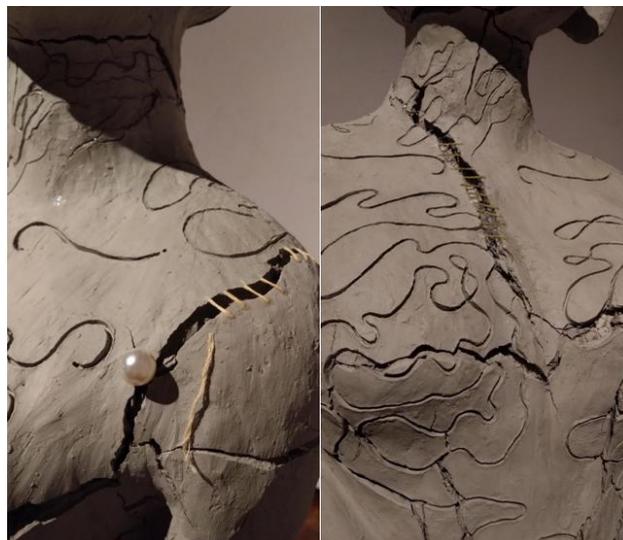


図 5.1 繕う：纏土偶ヒビを繕う

—線を着ける。自身の体感ドローイングを実際に皮膚上へ描くこと、或いはそれをタトゥーシールとして皮膚に貼ることによって線を着ける。これは、同じ着けるでもうごきや身体的な感じ方が異なる。皮膚へ直接描く方が内的うごきは強く感じられ、感覚の補強感が増す。タトゥーシールもうごきや速さと共にあるが、薄く、広がってゆく範囲が狭いように

感じられた、質感は微かにある。この違いは「刻まれている感覚」の強さによるものだと感じる。

—線を立ち上げる。空間ドローイングのはじまりにおける記録はまさにこれにあたる。この縮小版にあたる透過日記は、手軽に記録できる分身体感覚への連動が薄い。ここでの線がその場に立ち上がってくる、この立ち上がりはメタ的なところからはじまる。例えば、6m先の茶色の葉が重なり合う土の中から生えてくるようなうごきを両腕に感じた時、それを一旦私が身体ごとやってみる。それが空間ドローイングのはじまりの立ちあがりだ。透過日記ではそれよりメタ的に視覚として描く。

—線をつくる。そのうごきと対話するような、共同作業をするような感覚である。実際には触れることなどできていないのに、触れあいながらその中で線がつくられてゆく。これまでの実践では、やわらかな場面でしか遭遇されていない。例を挙げると、胎内ドローイングがこれにあたる。まるで、母の胎内にいるその人と同じ場所にいるような。母でもないのに蹴ったらそれに反応するような。でも一体となっているのとはすこし異なる感覚。



図 5.1 つくる：胎内ドローイングの様子

—線になった。いつの間にか私は線で、線がわたし。描いている時だけはそうであって、すべてが連動している。こころも、うごきも、質感も。わたしが感じられる。消して、ポジティブばかりではない。質感に応じて寂しさ、苦しさ、といったネガティブなものもしっかりと感じるが、それが心地良い。全身でこうだと感じられる、実感できる。終わった後のそれらは痕跡でしかなく、わたしとは全く乖離している。それがわたしであったことも信じがたい。

実践の過程において、線は当初の外的な対象から次第に内的なものへと変化し、やがてそれ自体を「わたし」と感じるようになった。線の中にいるときには生きている実感が強く得られ、線として在る己と線そのもののあいだに区別はなくなる。線はわたしであり、わたしは線であるという感覚が生じるが、それはもともと別々に存在していたものが一

体化するというよりも、そもそも分離して存在していなかったのではないかと思われるような感覚である。

わたしが線であると感じるとき、むしろ世界との境界は明確になり、自身の輪郭がはっきりと立ち上がる。しかしその状態は常に幸福感やポジティブな感情に満ちているわけではなく、ふと止まったり沈んだりする瞬間も含みながら、「ただ在る」という感覚として続いている。その中で、自分の身体としての存在と、「わたし」という存在そのものを、より濃く深く認識できるようになったと感じた。

5.2 軌跡と糸

自身の「線」について、文化人類学者ティム・インゴルドの理論[10]を援用し再考した。

- **軌跡(痕跡)としての線**：面の上に残された「出来上がったもの」。過去の行為の残影であり、保存・確認のための道具である。初期の記録や、土偶のヒビを「直そう」としていた段階がこれにあたる。
- **糸(生きたうごき)としての線**：現在進行形で伸びてゆく「生きたプロセス」。描く行為そのものが「まとう」ことと一体化した現在の実践である。

加えて、これらはドナルド・ショーンの反省的実践の枠組み[11]からも考えられる。軌跡が「行為の事後的な省察(Reflection-on-action)」、糸が「行為中の省察(Reflection-in-action)」となり、渦中のわたしとメタ認知する時の私とを往還しながら反省的に実践を行っているようであった。

記録が「過去の保存(軌跡)」から「いま、ここでの自己の編みなおし(糸)」へと進化したことは、本研究における重要な知見の一つである。

6 わたしとあなた

6.1 裸の存在としての自己

他者のまなざしを意識した「装い」の回路を一度遮断し、「まとう」実践に没入することで、私は他者に依存しない「裸の存在」としての自己を認識できるようになる。鷺田清一が述べる「まるでわたしがわたしの背後にいるかのような感覚」[12]は、ドローイングを通じて自己の輪郭を丁寧になぞるプロセスと類似すると考える。

6.2 あなたと接続されゆくわたし

自己探求の実践は、他者へと接続された。他者の行為詩を受けて描く「胎内ドローイング」は、混じり合っただけで一体化するのではなく、母体と胎児のように、独立しながらも同じ場所で響き合うような体験であった。これは、自己を自分自身で見出せるようになったからこそ、他者との関係に安心して入っていけるようになった。

7 結び

7.1 まとうとはいかなる営みか

本研究の問いに対する答えは以下の通りである。

RQ1. “まとう”の正体：曖昧な自己の感覚に「表現」という輪郭を与え、自己イメージを形成する存在論的実践である。

RQ2. 自身への影響：自己を確かなものとして認識（いま、ここに在る感）することで、他者の存在に囚われすぎず、日々の些細なしあわせやかなしみに気づけるようになった。

RQ3. 共有の可能性：完全な共有は未だ途上だが、ドローイングやワークショップを通じて他者と「共鳴」し、安心安全な場を創出する可能性が示された。

7.2 今後の展望

本研究は、筆者自身の個人的背景を起点として、正体は明確に言い表せないものの、確かに存在し自身を支えている営みを「まとう」という独自の身体感覚として定義し、その内的プロセスをアートベース・リサーチ（ABR）によって探究した。当初は服を手段として始まった実践は、一人称記述から鏡へのドローイング、さらに身体への直接的な描写へと展開し、その過程で多くの「線」が出現した。この線は過去の体感を保存する「軌跡（痕跡）」から、描く行為そのものが生きるプロセスと一体化した「糸（生きたうごき）」へと変容し、両者の往還が見られたと理解できる。線を描き、まとう瞬間には、他者のまなざしを介さずに「わたしのなかみはここに在る」という自己の輪郭を確かに認識できる感覚が生じる。また「纏土偶」の制作では、自身のコンプレックスの象徴でもある粘土のひび割れをあえて強調し繕うことで、「わからなさ」を手放す感覚が得られた。ここから自己は固定された像ではなく、絶えず変化し続けるプロセスとしての糸的な営みとして捉

え直された。

このように「まとう」営みは、曖昧な自己感覚に表現という輪郭を与え、自己イメージを形成することで、自らの手で安心できる場を創り出す存在論的実践であると考察した。本研究で示された身体感覚の記録と変容のプロセスは、現代社会において生きづらさを抱える人々が自己を支えるレジリエンスを獲得するための一つの方法となり得る可能性がある。さらに、「まとう」の定義そのものも固定されたものではなく、今後の実践を通して更新され続けてゆく。なお、本研究で論じた共有可能性については、今後ワークショップにおけるインタビューやアンケートなどの対外的調査を実施し、その妥当性を検証していくことが課題である。

謝辞

これまでわたしに関わってくれたすべてのもの、人々の存在と、それらと共に過ごした時間があってこそ探究できました。皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- [1] 鷲田清一, 人はなぜ服を着るのか, 筑摩書房, 2012
- [2] 西尾美也, 状況を内破するコミュニケーション行為としての装いに関する研究, 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程学位論文, 2011
- [3] 西尾美也, 装いは内破する, 左右社, 2024
- [4] 諏訪正樹. 一人称研究の実践と理論: 「ひとが生きるリアリティ」に迫るために, 近代科学社, 2022
- [5] 古屋千紘, 遠藤友咲, 松原正樹, “纏う”ことで私の心はどう動くのか, 人工知能学会第44回身体知研究会, 2024.12
- [6] 伊藤留美, アートベース・リサーチの展開と可能性についての一考察, 南山大学短期大学部紀要, Vol.39, pp.203-213, 2018
- [7] S. McNiff. Art-based research. In J. G. Knowles and A. L. Cole, editors, Handbook of the arts in qualitative research, chapter 3, pp. 29–40. Sage, Los Angeles, CA, 2008.
- [8] 鯨岡峻, 関係発達論の構築, ミネルヴァ書房, 2016
- [9] 小松佳代子, アートベース・リサーチの可能性, 勁草書房, 2023
- [10] ティム・インゴルド, 訳: 工藤晋, ラインズ, 左右社, 2014
- [11] ドナルド・ショーン, 訳: 柳沢昌一, 三輪建二, 省察的実践とは何か: プロフェッショナルの行為と思考, 鳳書房, 2007
- [12] 鷲田清一, じぶん・この不思議な存在, 講談社, 1996